



公益社団法人 茨城県農林振興公社  
穀物改良部  
〒311-4203 水戸市上国井町3118-1  
TEL 029-239-6300 FAX 029-239-6880  
<https://www.ibanourin.or.jp>

# 1. 令和8年度原種の生産について

当会社では、茨城県主要農作物等種子条例に基づき、県からの委託を受け、原種苗センターで主要農作物（稲・麦類・大豆）の原種生産業務を実施しています。業務では、一般農家用種子を生産する採種農家に必要な量の原種を確保するため、県農業研究所で栽培された原原種を元種に、原種苗センターの圃場18.1ha（水田10.5ha、畑7.6ha）で、県の指導のもと、原種の生産を行っています。

優良な原種を生産するために、稲・麦類・大豆

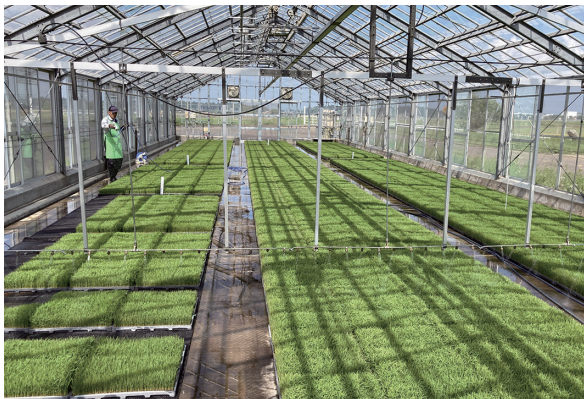
別に1年1作を原則とした圃場の利用を行い、圃場での人力による変異種や異品種の異株の除去や、混種防止のための作業機械や乾燥調製施設の分解・清掃を徹底して実施しています。

また、収穫した原種は、適正に乾燥や調製を行い、低温貯蔵庫で保管管理し、品質を保持したうえで採種農家に供給出来るよう努めています。

令和8年度は、稲5品種、麦類4品種、大豆2品種の原種を生産する予定です。

## 【令和8年度原種生産計画】

種類	作付面積(a)	生産数量(kg)	生産品種
稲	748	22,440	5品種（コシヒカリ、にじのきらめき、あきたこまち、一番星、月の光）
麦類	809	16,180	4品種（さとのそら、カシマムギ、カシマホープ、ミカモゴールド）
大豆	283	3,296	2品種（里のほほえみ、納豆小粒）
計	1,840	41,916	



稲の育苗



麦類の異株抜き

## も く じ

1. 令和8年度原種の生産について	1
2. 適切な対策で米の品質低下を防ごう	2
3. 気づかぬうちに収量減？それ、イネカメムシかもしれません	4
4. 米穀情勢について	6
5. がんばる種子生産者！（つくば市農業協同組合採種部会）	7
6. 穀物改良部ニュース	8
(1) 令和9年播種用大豆・そば種子生産委託計画	
(2) 令和8年度茨城県採種部会協議会総会及び全体会議を開催	
(3) 令和8年度茨城県稲作・そば共進会の参加者募集	

## 2. 適切な対策で米の品質低下を防ごう

茨城県農業総合センター 専門技術指導員 坪井真樹

近年、夏の暑さが米の品質に影響を与えています。

茨城県では2025年（令和7年）は、白未熟粒だけでなく、斑点米カメムシ類が過去11年間で2番目に多く発生したり、水分ストレスによるくさび米（黒点米）、刈り遅れによるヤケ米があったりと、着色粒の被害も多くなりました。

そのため、茨城県では、水稻の高温対策技術の普及を目的に、2026年（令和8年）2月に「暑さに負けない米づくり」チラシを作成し、Webページで公開しているので、その内容（概要）を紹介いたします（詳細は二次元コード参照）。



### 1. 高温耐性品種の導入

高温耐性品種の導入などの対策は、すでに顕著な効果を上げています。記録的な猛暑となった2025年（令和7年）においても、従来の「コシヒカリ」の1等米比率が半数を割る中、高温耐性品種（茨城県育成の「ふくまる」など）はいずれも高い1等米比率を維持しました（表1）。これらの品種への転換と、基本技術の徹底を組み合わせることで、気候変動下でも安定して高品質な米生産が可能になることが実証されています。

### 2. 高温対策の基本技術

#### ①品種の組み合わせによる高温リスクの回避

高温耐性品種の導入に合わせて、熟期の異なる早生や晩生品種の組み合わせや、早生や晩生に飼料用米や米粉用米等の新規需要米の組み合わせで、リスク分散とともに需要に応じた生産も可能です。

### 4 深耕と実肥により、白未熟粒による品質低下を軽減できました！

令和7年度 試験結果紹介		深耕による高温回避技術の確立 (筑西市現地試験・「コシヒカリ」)			
試験区	移植日 (月/日)	施肥チン量 (基肥+穂肥+実肥) (kg/10a)	千粒重 (g)	坪刈り 収量 (kg/10a)	整粒歩合 (目視判別) (%)
深耕+実肥	5/3	4.5+1+ <u>1</u>	21.5	565	62
普通耕+実肥	5/3	4.5+1+ <u>1</u>	21.5	524	54
普通耕	5/3	4.5+1	21.1	488	45

※ 深耕区の作土深は18.7cm（スタプルカルチ耕）、普通耕区の作土深は12.6cm（ロータリー耕）  
 ※ 土壌の可溶性窒素含量は、慣行区で20.6mg/100g、試験区で21.1mg/100gであり、中庸なほ場であった。  
 ※ 基肥：オール14、穂肥・実肥：NK-C6、栽植密度：50株/坪  
 ※ 穂肥は出穂前15日頃の7/11に施用、実肥は出穂前3日頃の7/22に施用

#### 結果

- 5cm深い耕うんと、出穂前2日頃に窒素で1kg/10aの実肥を組み合わせることで、生育は旺盛となり、登熟期の葉色も維持された。
- 白未熟粒の減少によって、整粒歩合は普通耕区より17%増加。
- 穂数、千粒重の増加によって、収量は普通耕区より16%増加。

#### 深耕初年目の注意点

- 土壌の窒素肥沃度が低い場合  
→ 生育に応じた追肥（時期・量）で調整する。
- 土壌の窒素肥沃度が高い場合  
→ 倒伏を防止するため、基肥を控えめにして追肥で調整する。

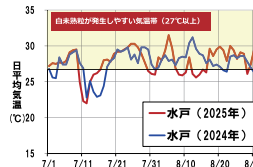
ご不明な点については、最寄りの農林事務所経営・普及部門、地域農業改良普及センター、JAにお問い合わせ下さい。

茨城県 JAグループ茨城

### 1 暑さに負けない米づくり対策

令和7年産米は白未熟粒だけでなく着色粒による被害も大きい

#### 7～8月の平均気温の推移（水戸市）



#### 7月上旬の斑点米カメムシ類の発生状況

地域	すくい取り虫数（頭/10回振り）		順位
	本年	平年	
県北	7.25	0.71	1
県央	0.83	0.27	1
鹿行	0.83	0.09	1
県南	1.42	0.41	2
県西	3.28	0.87	2
全県	2.32	0.46	2

※ 平均気温は水戸地方気象台のアメダスデータを用いた。  
 ※1 茨城県病害虫防除所「病害虫発生予測注意情報1号」（令和7年7月10日公表）より改変して掲載。  
 ※2 平年は平成27年～令和6年までの10年間の平均値。

- 7月中旬以降、白未熟粒が増加しやすい日平均気温27℃以上の高温が続いた。
- 斑点米カメムシ類の発生状況（7月上旬）は、過去11年間で2番目に多かった。

くさび米	やけ米	斑点米	白未熟粒
登熟初期の高温 水分ストレス	刈り遅れ 高水分期の収穫	斑点米カメムシ類の増加 防除時期のスレ	籾数過剰・低日照 登熟期の高温 登熟期の窒素不足

- くさび米、やけ米、斑点米などの着色粒の発生が特に多かった。
- 高温による白未熟粒の発生も昨年に引き続き多い状況。

#### 令和8年産米の1等米比率の向上に向けて

- 高温対策技術の実践と高温に強い品種の導入
- 斑点米カメムシ類の徹底防除

【図1】「暑さに負けない米づくり」チラシ（抜粋）

表1 茨城県の水稲玄米の1等米比率の推移

種類・品種銘柄	H22	H30	R元	R2	R3	R4	R5	R6	R7
水稲うるち玄米	76.2	87.0	80.9	81.6	83.3	67.8	55.9	55.5	54.9
コシヒカリ	80.9	89.1	82.8	80.8	82.6	60.2	46.3	49.1	46.1
ふくまる	—	87.5	82.8	85.6	87.3	87.9	77.7	74.9	80.1
にじのきらめき	—	—	—	—	94.4	87.2	76.1	72.0	62.7

注) 農林水産省「米の農産物検査結果」を参照した (R7はR8/3/31現在の速報値)。

## ②早めの中干しで茎数を抑える

籾数が多くなるほど白未熟粒のリスクは高まります。このため、適切な時期の中干しにより茎数制御し、籾数を適度に制限することが重要です。

「コシヒカリ」の中干しは、目標とする穂数の8割が確保できた時点で行います (写真1)。

中干しの程度は、田面に軽くヒビが入る程度とし、土ぼこりが舞うほどの中干しは控えます。



【写真1】中干し開始時期のイネの様子

## ③出穂後は間断かんがいで乳白粒の発生軽減

間断かんがないなどの積極的な水管理で土壌中に酸素を送り込み、根の活力を維持する必要があります。

間断かんがないは、自然落水後の田面が乾く前に (指で触ると湿り気を感じる程度の状態) に入水するようにします。

## ④適期収穫で胴割抑制。籾の色で判断!

「コシヒカリ」の収穫開始の目安は帯緑籾率 (緑色の籾の割合) が10%程度です。籾の状態を確認して適期に行うようにします。

## ⑤足元から改善! 堆肥の施用と耕深の確保

養分補給などには、堆肥の活用や深耕が有効です。堆肥の中でも、牛ふん堆肥は土壤改良効果が

高いことから、乾田では1t/10a、湿田では0.5t/10aを目安に積極的に施用します。

また、作土が浅くなると根の張れる範囲が狭くなり、それだけ栄養分の吸収も限られます。

意識的に15cm以上の深耕を行い、根の健全化を図ることが、白未熟粒の低減につながります。

## 3. 高温対策としての実肥

出穂期ごろの葉色が淡くなりすぎると、白未熟粒の発生を助長します。

窒素施肥を抑えた良食味栽培や登熟期の一発肥料の肥効切れは、高温による品質の低下を助長している可能性がありますので、出穂期ごろの葉色が淡いと予想される場合は窒素1kg/10a程度の実肥を行います。

## 4. 病害虫の防除

近年は、暖冬による越冬成虫の増加や夏季の高温条件によって病害虫被害の増加が懸念されています。水稲では、斑点米カメムシ類や紋枯病などの被害が茨城県内で増加傾向にあります。

中でも近年増加している「イネカメムシ」は、畦畔を経由せず直接水田に飛来する特徴があるため、従来の草刈りだけでなく、水田内の発生状況を確認した適切な本田防除 (薬剤散布) が重要となります。

また、適切な薬剤散布のためには、病害虫の発生状況を確認し、適切な時期 (1回目: 出穂期~穂揃期、2回目: 出穂後10~15日頃) と、その時期に散布可能な使用方法のある薬剤の選択が重要です。

自身で薬剤散布が困難な場合は、無人ヘリやドローン等を活用した作業委託を検討します。

### 3. 気づかないうちに収量減?それ、イネカメムシかもしれません

農業総合センター農業研究所 病虫研究室 島田 峻

#### 1. イネカメムシとは?

イネカメムシは体長約12~13mm、大型で茶褐色の斑点米カメムシ類です(写真1および2)。成虫で越冬し、早生品種の出穂が始まる7月上~中旬ごろに水田に飛来して、穂を加害しながら交尾・産卵します。その後、卵からかえった幼虫も穂を加害しながら成長して約1か月後に成虫となり、晩生品種等の出穂直後の水田に移動し、水稻の収穫期ごろになると越冬地へと移動します。

イネの穂が本種によって吸汁加害されると斑点米(写真3)を生じ、品質低下(等級格下げ)を引き起こします。イネカメムシは籾の基部を好んで加害するため、玄米基部が変色する斑点米となります。また、他のカメムシよりも吸汁能力が高く、出穂期~乳熟期に本種の加害がはなはだしい場合は不稔を生じることから、玄米品質低下だけでなく、収量の低下にもつながります。

#### 2. 茨城県内全域で発生を確認

県の病害虫防除所が毎年8月上旬に水田で行っているすくい取り調査によると、2018年以降に発生地点率が増加し、2025年には全調査圃場の約26%でイネカメムシの発生を確認しています。また、成幼虫数についても近年発生が多い傾向が続いています(図1)。

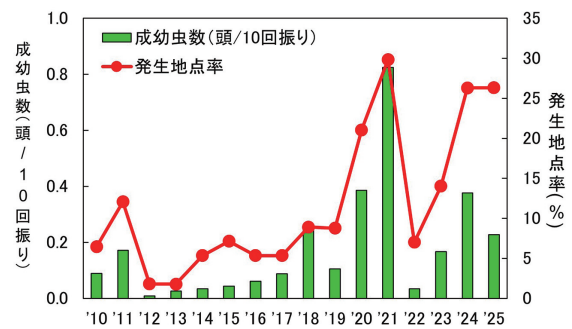


図1 県内におけるイネカメムシの発生状況 (8月上旬すくい取り、病害虫防除所調査)



写真1 イネカメムシ成虫

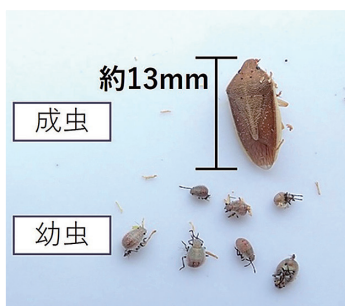


写真2 成虫と幼虫の大きさ比較



写真3 斑点米(基部加害)

図2は、病害虫防除所が調査している圃場で、2001年以降で初めてイネカメムシの発生を確認した時期を示しています。2010年ごろまでは県南地域を中心に発生が確認されていましたが、2016年以降、県央・県西地域に拡大し、2025年にかけては県北地域を含めて県内全域で発生が確認されるようになりました。

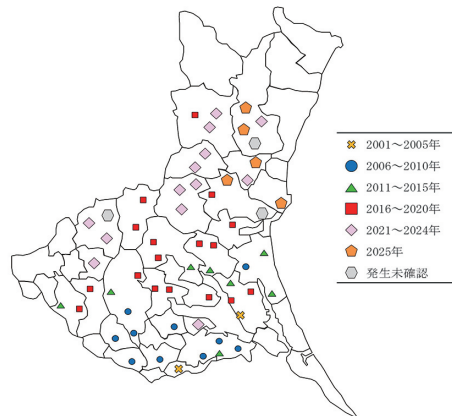


図2 病害虫防除所調査圃場における2001年以降でイネカメムシを初めて確認した時期

### 3. 防除のタイミングは「出穂期～穂揃期」と「乳熟期」

イネカメムシによる不稔を防ぐための防除適期は出穂期（圃場全体の4～5割が出穂した日）～穂揃期（圃場全体の8～9割が出穂した日）ですが、適期を逃さないように早めの散布を心がけてください。また、斑点米の抑制に効果的な薬剤散布適期を調査した結果、出穂期9～15日後（乳熟期ごろ）の防除により斑点米混入率を低く抑えることができました（データ省略）。そのため、イネカメムシが発生している地域では、出穂期～穂揃期防除と乳熟期ごろの2回防除を行うことにより、不稔と斑点米の発生を少なくすることができると考えられます（図3）。

散布薬剤の選定にあたり、イネカメムシ成虫に対する薬剤の残効性※を調査した結果、キラップフロアブルとスタークル液剤10は、殺虫効果が散布後7日以上持続することを明らかにしました。また、エクシードフロアブルやトレボン乳剤の殺虫効果は認められましたが、残効性はやや短く不安定で、スミチオン乳剤の殺虫効果が認められたのは散布3日後までで、残効性は短いと考えられました（表1）。ただし、キラップフロアブル（エチプロール剤）については、他県の一部地域で薬剤抵抗性（耐性）を持ったイネカメムシの出現が報告されているため、連続使用は避けてください。これらのことから、出穂期～穂揃期の防除には残効性の長いキラップフロアブルやスタークル液剤10を主軸とし、2回目の防除はIRACコードの異なる薬剤を組み合わせたローテーションを組むことが重要です。

早生や晩生品種など周囲と出穂期が異なる圃場では、イネカメムシの密度が高くなりやすいため、特に注意が必要です。薬剤の散布時期がずれてしまうと十分な効果が得られないため、適期防除を心がけましょう。

※本試験は薬剤散布後、雨が当たらない施設内で管理したイネを用いて実施したため、自然条件下では残効期間が異なる可能性がありますので注意してください。

表1 イネカメムシ成虫に対する各種薬剤の残効性（稲体散布法）

商品名（薬剤名） 希釈倍数 IRACコード	薬散布後 日数	放飼72時間後の補正死虫率 <sup>1)</sup> (%)			
		採集地・時期（R6年）			
		利根町	水戸市	7月	8月
キラップフロアブル （エチプロール水和剤） 1,000倍 IRAC：2B	0日後	100	100	100	100
	3日後	100	100	100	100
	7日後	100	100	100	100
	10日後	100	100	100	100
スタークル液剤10 （ジノテフラン液剤） 1,000倍 IRAC：4A	0日後	100	100	83	82
	3日後	100	100	100	82
	7日後	100	100	100	60
	10日後	100	80	100	44
エクシードフロアブル （スルホキサフロル水和剤） 2,000倍 IRAC：4C	0日後	91	100	83	82
	3日後	78	89	50	55
	7日後	100	15	100	20
	10日後	78	20	82	56
トレボン乳剤 （エトフェプロックス乳剤） 2,000倍 IRAC：3A	0日後	100	82	100	82
	3日後	56	22	42	18
	7日後	100	86	100	80
	10日後	67	20	37	56
スミチオン乳剤 （MEP乳剤） 1,000倍 IRAC：1B	0日後	100	100	100	100
	3日後	100	100	100	100
	7日後	22	0	36	20
	10日後	22	10	1	0

1)補正死虫率(%) = {(対照区生存率-処理区生存率)/対照区生存率} × 100。対照区は水道水を用いた。

※試験に使用した農薬は、令和8年5月20日現在、水稲のカメムシ類に登録がある。

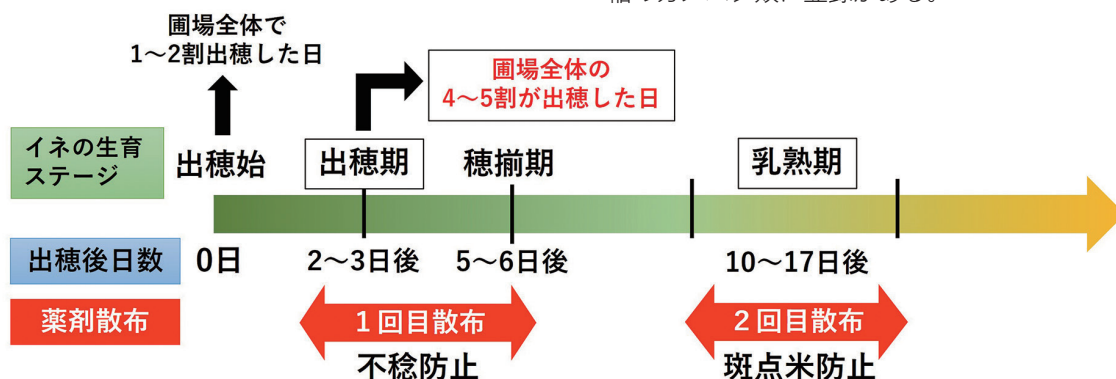


図3 イネカメムシの防除適期

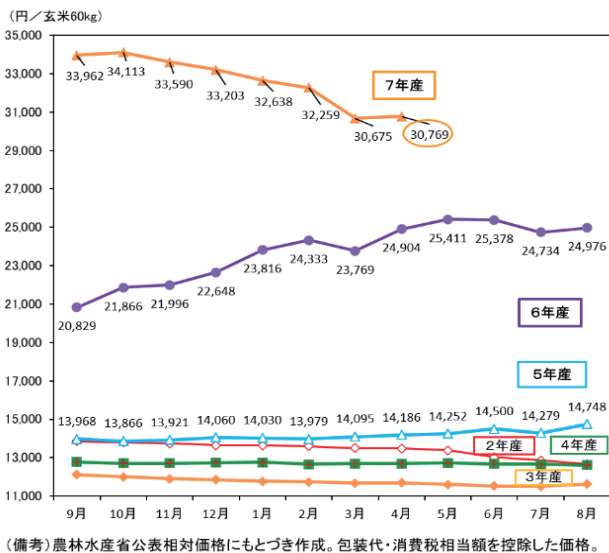
# 4. 米穀情勢について

全農茨城県本部 米穀部 米穀課

## 1. 価格の動向 (図表1, 2)

- (1) 農林水産省が公表した7年産相対販売価格 (令和8年4月時点、税別・包装抜換算)は、30,769円/60kgと、前年同月と比べて+5,865円となっています。
- (2) 7年産米主要銘柄の市中価格は、9月以降下落を続けてきましたが、2月は下落のペースが落ち着き、直近では約19,000円~22,500円程度で取引されています。

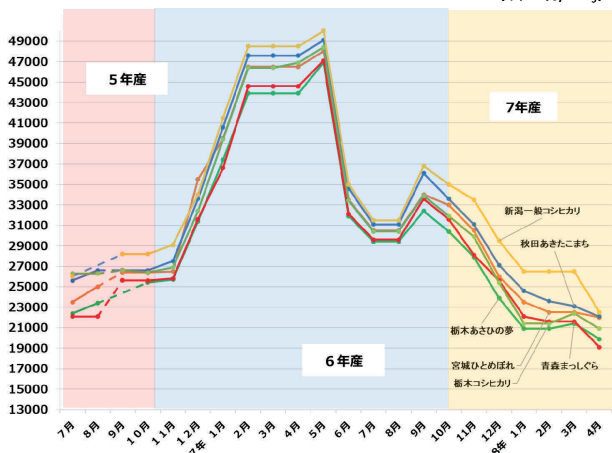
【図表1】相対取引価格の推移 (8年4月末)



(備考) 農林水産省公表相対価格にもとづき作成。包装代・消費税相当額を控除した価格。

【図表2】5・6・7年産市中価格 (4月)

(単位: 円/60kg)



## 2. 8年産米の作付け意向

- (1) 5月20日に農林水産省が公表した4月末時点の8年産の水田における作付け意向によると、8年産の主食用米の作付面積は、136.3万ha (対

前年0.4万ha減)、備蓄米が2.7万ha (対前年2.7万ha増)、合計すれば対前年2.3万ha増となりました。

- (2) 平均単収 (538kg/10a) で計算すると、主食用米733万ト、備蓄米15万トに相当します。主食用米は国の指針711万トを22万ト超過しています。

## 3. 今後の需給見通し (図表3)

- (1) 3月23日開催の食糧部会では、7年産生産量と需要量の変動が加味され、8年6月末民間在庫量は221~234万トと示されました。
- (2) 8年産生産量は711万トと据え置かれましたが、1月末作付け意向をふまえた見通しも示され、生産量719~732万トで作付けが進んだ場合、9年6月末在庫は229万ト~271万トになることが試算されました。

その後、5月20日に国が公表した4月末作付け意向をふまえて見通しを集計すると、備蓄米の面積が増加する一方、主食用米から水田活用米穀への転作が進まず、主食用米の生産量は727~733万トの作付けとなり、9年6月末在庫は237万ト~271万トの試算となっています。これは、適正とされる水準を大幅に上回ることに なります。

- (3) また、足下の販売は停滞傾向にあり、需要の減退による更なる在庫の増加も懸念される状況にあります。

【図表3】今後の需給見通し (3月食糧部会)

		①10月基本指針		②3月食糧部会	
R	7年6月末民間在庫量	A	155	155	
	7年産主食用米等生産量	B	748	747	
	政府米供給量	C	23	23	
	供給量	D=A+B+C	926	925	
	需要量	E	697~711	691~704	
8	8年6月末民間在庫量	F=D-E	215~229	221~234	
R	8年6月末民間在庫量	G=F	215~229	221~234	221~234
	8年産主食用米等生産量	H	711	719~732	727~733
	供給量計	I=G+H	926~939	940~966	948~967
	需要量	J	694~711	696~711	696~711
9	9年6月末民間在庫量	K=I-J	215~245	229~271	237~271

※4月末作付け意向をふまえた見通しは、8年産生産量の上限を作付け意向の平均単収換算733万ト、下限を備蓄米21万ト、全量買い入れた場合 (733万ト-(21万ト×15万ト)=727万ト) として試算

## 5. がんばる種子生産者！



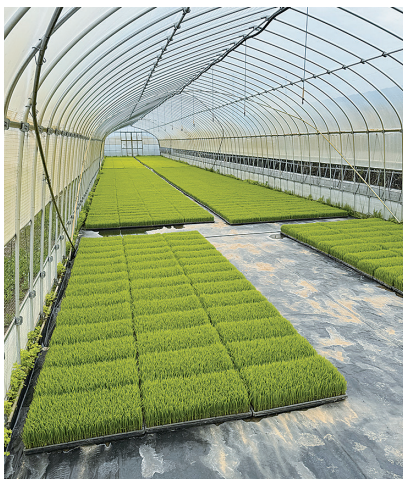
つくば市農業協同組合 採種部会  
有限会社 関農産 関 元章さん

### ◆ 経営規模

- ・水稲（コシヒカリ・にじのきらめき）70ha  
うち にじのきらめき採種 5.8ha
- ・小麦（さとのそら採種） 7.4ha
- ・大豆 10ha

### ◆ 主な保有機械

- ・トラクター 12台
- ・コンバイン（6条） 3台
- ・汎用コンバイン 1台
- ・田植機 2台
- ・ドローン 1台
- ・乾燥機（100石） 1台
- ・乾燥機（80石） 5台
- ・糶摺り機 1台



育苗風景



トラクター



ドローン

### ◆ 品質向上の取組

私は、地域の主要な担い手の一人として、水稲や麦類の高品質種子生産に取り組んでいます。

また、地域の同年代若手生産者との交流により、栽培技術等の情報交換を積極的に行うなど、日々自己研鑽に励んでいます。

### ◆ 栽培管理

水稲防除では、ドローンにて、稲こうじ病やカメムシ類対策を適期徹底することで、高品質な種子の生産に努めています。

麦類の水田転換畑では、額縁暗渠による湿害対策を行っています。連作障害対策としてブロックローテーションを行い、安定した品質の種子生産を目指しています。

水稲・麦類ともに雑草防除を徹底するために、除草剤の体系処理や適期散布を心掛け、雑草を極力発生させないように努めています。

### ◆ 今後の抱負

担い手の高齢化によりリタイヤする農家が今後加速的に進むと思うので、大幅な規模拡大にも耐えうる強い経営体、そして地域農業をリードできるようにもっと努力を重ねていきたいと考えています。

## 6. 穀物改良部ニュース

(1) 令和9年播種用大豆・そば種子生産委託計画  
4月24日(金)、当公社(旧穀物改良協会)会議室において、令和9年播種用大豆・そば種子生産委託会議が開催され、生産委託計画が了承されました。

県産地振興課から提示された令和9年播種用大豆・そばの採種計画は、大豆が面積・数量共に前

年から減少、そばについては面積・数量共に増加という内容でした。

当公社では、これに県外からの注文、県外への委託、在庫数量、種子場の種子生産の状況等を考慮したうえで、種子生産計画及び各種子場農協への委託計画を策定しました。

令和9年播種用大豆種子生産委託計画(種子場農協別)

項目 品種	計画面積及び数量		種子場農協別生産委託面積及び数量									
			水戸		やさと		北つくば(真壁)		北つくば(岩瀬)		委託合計	
	面積 (ha)	数量 (kg)	面積 (ha)	数量 (kg)	面積 (ha)	数量 (kg)	面積 (ha)	数量 (kg)	面積 (ha)	数量 (kg)	面積 (ha)	数量 (kg)
里のほほえみ	33.6	47,000	16.4	22,900	4.0	5,200	9.0	12,600	4.4	6,300	33.8	47,000
納豆小粒	13.3	12,000	11.6	10,400	1.8	1,600	-	-	-	-	13.4	12,000
計	46.9	59,000	28.0	33,300	5.8	6,800	9.0	12,600	4.4	6,300	47.2	59,000

令和9年播種用そば種子生産委託計画(種子場農協別)

項目 品種	計画面積及び数量		種子場農協別生産委託面積及び数量									
			常陸(山方)		常陸(太田)		水郷つくば(美浦)		水郷つくば(阿見)		委託合計	
	面積 (ha)	数量 (kg)	面積 (ha)	数量 (kg)	面積 (ha)	数量 (kg)	面積 (ha)	数量 (kg)	面積 (ha)	数量 (kg)	面積 (ha)	数量 (kg)
常陸秋そば	49.1	27,000	-	-	21.0	12,000	10.4	11,000	4.6	4,000	36.0	27,000

(2) 令和8年度茨城県採種部会協議会総会及び全体会議を開催

6月5日(金)、ホテル・ザ・ウエストヒルズ・水戸において、茨城県採種部会協議会(会長:谷田部貞雄氏)総会及び全体会議が開催されました。

総会では、令和7年度の種子生産に関する活動報告、令和8年度の事業計画等の議案について承認されました。

全体会議では、令和7年度末に実施された種子産地の将来予測と種子産地ビジョン策定のためのアンケート結果について、県産地振興課の四宮主任より説明があり、種子産地を将来に渡り維持していくための方策について検討されました。



(3) 令和8年度茨城県稲作・そば共進会の参加者募集

令和8年度の「稲作共進会」、「そば共進会」の参加申込が始まります。

各共進会への参加方法等については、当公社(穀物改良部)ホームページ[<https://www.ibanourin.or.jp/kokumotsu/>]の開催要綱をご覧ください。各共進会へお問い合わせください。

多くの方の参加をお待ちしております。

〈参加申込期間〉 稲作共進会 : 10月1日~10月16日  
そば共進会 : 9月1日~10月30日

〈ホームページ用QRコード〉

